©2022 YHAL, YITP, Kyoto University
京都大学基礎物理学研究所　湯川記念館史料室

破滅から人類を守ろう

湯川秀樹氏 対談 大仏次郎氏

科学者京都会議を終えて

人類意識が第一

大きな理想・たゆまぬ努力を

核実験の禁止が出発点

核戦争防止と世界平和への願いをこめて七日から京都市右京区天竜寺で開かれた科学者京都会議は九日終わったが核実験問題はどう受け取ったらよいのだろうか、また人類滅亡の恐怖を取り除くにはどうしたらよいのだろうか、この機会に会議に出席した京大基礎物理学研究所長の湯川秀樹博士と作家の大仏次郎氏に京都市左京区岡崎「おく山」で対談してもらった。

湯川　核兵器、原水爆実験はもう以前からの問題で、私たちも科学者として自分たちの責任を感じてこれまでもいろいろやった。しかし核兵器の問題を考えるとそれ自体の性能や手段など年々目ざましく発達、そうなると問題の重点も変わってくるのです。そこで問題の解決はどこにあるのかを考え直してみることが必要です。むろん出発点は原水爆実験の禁止から始まるとしても一般的な完全軍縮にまでいかなければならないのですから。

これには経済的な諸問題もからんでいるわけですから、つまり完全軍縮を実現したとしても一般的な目的が達成されたからおしまいということではないのですから、そうなればいろいろな、たとえば世界的な法秩序の問題なども出てくるでしょうし…とうい物理学者だけでは考えあぐねてしまう。そこで我々としては先の見通しを持って単なる反対、反対というだけでなく、大きな目標、理想を打ち立てていかなければならないと思います。

私はどちらかといえば夢想家的人間で、その傾向は強いわけですが、ともかく日本でパグウォッシュ会議のような会を開くのも結構、できるだけ広くみんなで関係のある問題を大きく深く広くとらえていきたい。こんどの京都会議もその手始めというわけで各方面の方々が意思を表明して積極的に参加してくれたのは心強いことです。第一回としてはある程度問題点らしいものを取り上げ、声明にあるようにこうしたらよいというところまで一応出すことができた。

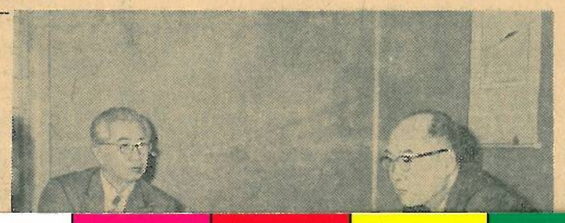
大仏　僕はたにかくどちらかといっても相手のあることで絶望していた。どうも非科学的な人間で一足とびだが結論はいつも同じところに落ち着いてしまうのですが、専門家との会談に出れば何とかなるだろうと思って顔を出したわけです。もっとむずかし過ぎるのではないかという懸念もありました。

湯川　これにはいろいろのカンどころがあると思う。核兵器そのものの話がありますがね……。しかしこんどのは専門の科学者たちの考えたことを声明したのだから権威もあるし、世の中への影響力も強いのではないかと思う。

湯川　ちょっと違う感じを持っているのだ。私たち科学者がいう局は何をやってもしようがない"ということになってしまう。私もそうなりやすいが自分に鞭打って明るい方向に目を向けることが必要だと思っている。

大仏　大体政治家の発言や声明だと世間が信用しないのじゃないかと思う。イソップにオオカミ少年の話があるが、世界が破たんをきたさないことを研究し合っていくことが大切。私はこの際、未来に大きな希望をもつことがもっとも必要なことではないかと思う。

また憲法第九条の問題は制定当時は終戦後の悲惨な状態からのムード的なものだった。しかしそれ以後に核兵器が発達、人類破滅の可能性が出てきたので新しいっそう大きな意義を持つようになった。そういう点を世間のみんなによく知ってほしい。私は最近言はよく使われていながら最近あまり使われない「理想主義」ということばを考える。大変困難な時期を乗り越えるためにはこれで新しい意味での「理想主義」がもう一度新しく生まれ出て、これをかかげて、しかもこれを成長させなければならないのではないかと考えているのです。そうでないとどうしても物事に対する態度が"結



対談する湯川秀樹氏（

「科学の悪用」防げ

完全軍縮に使命感を

京都会議声明

七日から三日間京都市右京区嵯峨、天竜寺と京大基礎物理学研究所で開かれた「科学者京都会議」は九日最終日を迎え、午後三日間の討議をまとめ「科学者京都会議」を正式名称として採用、この名で声明を発表した。声明発表は予定より遅れ、午後五時四十五分から京大基礎物理学研究所講堂で行なわれた。（三面に声明全文、十二面に関連記事）

記者会見に出席したのは参会者十一人のうち所用で京都を離れた宮沢東大名誉教授、都留一橋大教授、一沢京大教授、湯川京大教授が三人のうち所用で京都を離れた宮沢東大名誉教授、都留一橋大教授、一沢京大教授、湯川京大教授が一を除く十人。まず湯川京大教授が一続いてこんどの会議で事務局長役一千字に近い長文の声明を読み上げた。

声明はまず前文で核戦争による人類破滅の危機を避けるため、平和に対する責任を改めて強調したいと述べたあと

一、科学の成果の誤用、悪用防止。

一、核兵器の威かくによる平和維持の考え方に反対。

一、核実験禁止協定のすみやかな締結。

一、核兵器運搬手段の廃棄と他国領土内の軍事基地撤去。

一、軍備による経済の構造変換に対する検討の必要。完全軍縮は全人類の使命。

一、平和に対する意識の向上。

の六点を訴えている。

とくに戦争放棄を規定したわが国の憲法をあくまで守ろうという点がすべての基調として強調されている。この声明に賛名したのは会議に出席した湯川、朝永、坂田、桑原、田島、三宅、宮沢、都留、谷川、大仏、福島、田中の十二氏。会議の趣旨に賛同したが、出席できなかった薄原繁（東大名誉教授）大内兵衛（同）我妻栄（同）芝誠司（東大学長）菊地正士（原子力研究所長）江上不二夫（東大教授）三村剛昌（広島大名誉教授）川端康成、平塚雷鳥の九氏には声明文を送ったうえ賛名を求める。

またこうした会議は今後も引き続き開催する必要があるとの点で意見の一致をみ、湯川、朝永、坂田三氏が継続委員会を構成、国際情勢とにらみ合わせ適時同じメンバーで会議を開くことにした。

大仏　いやよ[illegible]向かいには風山が[illegible]新緑突に気持[illegible]済院という寺で[illegible]いでしょう。

湯川　我々が[illegible]

©2022 YHAL/YITP, Kyoto University
京都大学基礎物理学研究所

京都会議を終えて

京都市右京区天竜寺で開かれた科学者京都会議は九日終わったが核実験問題、人類滅亡の恐怖を取り除くにはどうしたらよいのだろうか、この機会に会議議長湯川秀樹博士と作家の大仏次郎氏に京都市左京区岡崎「おく山」で対談してもらった。みんなで関係深く広くとらえどの京都会議としたが、そういう特別な専門的な理論は出なかった。

湯川 大体専門を離れたことわけで各方面をお互いに話し合おうという努力して積極的にでわかり合えたわけです。

大仏 こんどの会を通して危心強いことでのものをなくしてしまうことはできないにしても、たとえば弾頭とミサイルそのものとは大きさも違っており、核兵器の運搬、発射の方は国際管理も容易なことが明らかにされてきた。このことも含み切れれば先は明るい。世界が彼だんをきたさないことを研究し合っていくことが大切。私はこの際、未来に大きな希望をもつことがもっとも必要なことではないかと思う。

また憲法第九条の問題は制定当時は終戦後の悲惨な状態からのムード的なものだった。しかしそれ以後に核兵器が発達、人類破滅の可能性が出てきたので新しくいっそう大きな意義を持つようになった。そういう点を世間のみんなによく知ってほしい。私は最近昔はよく使われていながら最近あまり使われない「理想主義」ということばを考える。大変困難な時期を乗り越えるためにはこれで新しい意味での「理想主義」がもう一度新しく生まれ出て、これをかかげて、しかもこれを成長させなければならないのではないかと考えているのです。そうでないとどうしても物事に対する態度が〝結局は何をやってもしようがない〟ということになってしまう。私もそうなりやすいが自分に鞭打って明るい方向に目を向けることが必要だと思っている。

大仏 大体政治家の発言や声明だと世間が信用しないのじゃないかと思う。イソップにオオカミらんことにあまりのさばり過ぎるのはーと考え、また権威がないのではないかと心配しているのだ。だから科学者ばかりでなく、一般知識人にも参加してもらったのだがそれでも心配が消えない。それだけに私は私なりに声明の文章にもずいぶん気を使ったつもりだ。

ところでアインシュタインが国連に出した公開状の中に「全体的な破滅を防ぐという目標にはほかのあらゆる目標に優位する」ということがある。谷川氏が〝アインシュタインの原則〟と名づけた。この原則でいろいろのことを判断すべきだと思う。

人類が宗教的によほど深い人間になれば〝人類意識〟よりも深いところへ達するかもしれないが、現代から未来にかけて〝人類意識〟をしっかり持つことが大切だと思う。なかなかそういう考え方は定着しにくいけれどもなんとかいま〝人類意識〟を定着させねばならないと思うのですよ。

大仏 同感です。

湯川 この機会に大仏さんにうかがいたいのはフランスのドレフュース事件のことです。アカデミズムに安住することが学者にとっていちばんいいのはもちろんだが、作家にとっても同じことがいえるのではないですか。その点ドレフュース事件でのゾラの動きは注目すべきことだと思う。

大仏 ドレフュース事件のゾラの最初の動機は人気取りというきわめて人間くさいことからなんです。ところがみんながたたかれて初めて勇気がわく。しかも当時のフランスの良心ともいえる文士や画家がゾラの側につき、遂にはドレフュースを有罪にしようとする軍部に抵抗して無罪にまでもっていった。ゾラ自身、最初は女優が舞台に出るような気持でやったと言っている。つまりゾラが人気取りに投げた石がフランスのインテリゲンチャに波紋を投じたわけです。

湯川 ゾラのような人も世の中には多いでしょうね。だが動機はどうあれ、ゾラが一人でも出したことは大変なことだと思う。それから作家の持つ影響力は私たち科学者の持つ影響力と比べものにならないと思うんですが…。私ら科学者がどんなにがんばってみても作家が小説を通じて社会に与える影響からみると小さなものです。

大仏 いや、作家が作品を通じて世界に与える影響はまったく一時的なものですよ。それに比べると科学者の持つ〝建設する力〟は実に大きい。作家にはそのような力がない。大体文学は現実をこわすとか、笑うとか、怒るとかいった立場をとりがちだ。もちろんトルストイやロマン・ローランのように人生を深く見つめる人もいるにはいるが、近代文学の主流とはいえない。本流は〝現実をこわす態度〟にあるようだ。私はもっと人生と正直に取り組んでくれる健康な作家が出てほしいと思うんだが、早く世間に作家として認められるのには建設的なものより、ぶっこわすことの方が書きやすいんですね。建設ということは大変な苦労だから。

湯川 建設的な力を科学が持っていることはたしかだが、現在ではそれも一面にすぎない。原子力が出現して以来一方で研究の積み上げがあると同時に他方では一朝にすべてを破壊する力を持ってきている。この力が現在では決定的な問題になっているんですね。この点科学も十九世紀と二十世紀では大変変わってきている。私たち科学者の悩みの種はここにあるわけだ。

大仏 プロメテウスが火を生んで以来大火事は絶えないという点もあるが、扱い方ではよいこともある。もちろんその〝火〟と原子力時代の第三の火とは比較にならない。

湯川 まったく違う。原子力の破壊力が科学そのものの性格とはいえない。しかしこの性格は永久になくならないと思う。一たんは核兵器をぶちこわすことができてもその技術は残る。つまり根本的には人類破滅の可能性は永久に残ると思う。まったく運命的なものだ。それだけに人類はいつまでも常にこうした努力を続けていかねばならないのだ。

人類意識が第一

大きな理想・たゆまぬ努力を

核実験の禁止が出発点

対談する湯川秀樹氏(右)と大仏次郎氏(左)＝京都岡崎「おく山」で

「人類」防げ に使命感を

京都会議声明

都会議は九日最終日を迎え、午後三日間の声明発表は予定より遅れ、午後五時四十五分から事務局長役を勤めた豊田利幸立教大教授が三千字に近い長文の声明を読み上げた。

声明はまず前文で核戦争による人類破滅の危機を避けるため、平和に対する責任を改めて強調したいと述べたあと

一、科学の成果の誤用、悪用防止。

一、核兵器の威かくによる平和維持の考え方に反対。

一、核実験禁止協定のすみやかな締結。

一、核兵器運搬手段の廃棄と他国領土内の軍事基地撤去。

一、軍備による経済の構造変換に対する検討の必要。完全軍縮は全人類の使命。

一、平和に対する意識の向上。

の六点を訴えている。

とくに戦争放棄を規定したわが国の憲法をあくまで守ろうという点がすべての基調として強調されている。この声明に署名したのは会議に出席した湯川、朝永、坂田、桑原、田島、三宅、宮沢、都留、谷川、大仏、福島、田中の十二氏。会議の趣旨に賛同したが、出席できなかった南原繁（東大名誉教授）大内兵衛（同）我妻栄（同）茅誠司（東大学長）菊地正士（原子力研究所長）江上不二夫（東大教授）三村剛昌（広島大名誉教授）川端康成、平塚雷鳥の九氏には声明文を送ったうえ署名を求める。

またこうした会議は今後も引き続き開催する必要があるとの点で意見の一致をみ、湯川、朝永、坂田三氏が継続委員会を構成、国際情勢とにらみ合わせ随時同じメンバーで会議を開くことにした。

c092-015-028